

上林 茂暢 著「病院自動化 その現状と将来」

問題意識への実証分析が希薄 石井 咲 禧

本書は冒頭「いまや日本医療、とくに病院医療は、自動化・コンピュータ化を軸とした医療技術革新の成果を背景に、重大な転機を迎えようとしている。」と極めて現代的な問題意識の提示が行われている。続いて克明な実態分析が内容となっている。

著者の問題意識が論理展開されるのは、第Ⅲ部第2章「大型機器の導入と病院経営」、終章「病院自動化と“脱病院化社会”」であるが、本書が他を抜き出しているのは、むしろ第Ⅰ部「病院自動化の現状」、第Ⅱ部「診断と治療部門での変革」で典型的に見られる克明な実態分析であろう。ここではME機器の現状・歴史が、日本医療の現場に即して包括的・具体的に分析され、問題点が指摘されている。臨床医の眼が感じ取られるところである。ジャーナリストたちにありがちな過大な期待・幻想も、反発もなく、妥当な分析と言ってよい。

しかし、この分析を踏まえた日本医療の「重大な転機」の分析と言うことになると、十分な論理的展開がなされているとは評価し難い。

現在の病院危機が、大型高度装備病院と老人病院への二極分解に象徴されているとする著者の見解には評者もまた意見を同じくし、臨床医としての危惧を共にする。だがこの事態を「病院の自動化」と総括したり、あるいは「病院の自動化」が原因と考えたりするのは無理があると考えるし、大型高度装備病院を「自動化病院」と規定するのも誤りであるし、これら大型病院の問題点を突いていないと思われる。

そもそも本書の具体的な分析自体

が病院自動化の存在すら実証していない。第Ⅰ部「病院自動化」において述べられている自動化とは検査機器の自動化に過ぎない。「病院自動化は幻だ」あるいは「病院自動化とはただかこんなものだ」と主張しているのかとも考えたが、論理展開はそうには読めない。

なぜならば、大型高度装備病院の問題性を「対人サービスの低下」と結びつけて論じているからである。

「大型病院においてさえ、今なお十分な看護が行われていない。」と臨床の実践家として主張するのならよく分かる。だが看護の状況の歴史的变化をマクロに客観的に見る限り、一類→特一類→特二類へと基準看護が整ってきているのが病院の趨勢である。この傾向は大型高度装備病院においてこそ著しい。にもかかわらず、著者の発明した「自動化病院」という概念は実体のないまま一人歩きをし、「医療費は増大したが、それに見合った形で対人サービス部分はふえず、病院自動化は病院工場化を加速した。」と述べている。しかし病院医療費の増大のスピード以上に病院人件費は増大しているのである。設備投資の増大が人件費を抑制したという事実が存在しない以上、対人サービス一般をこのように論じるのは破綻している。

そのため観念的批判のみ高揚し「対人サービスの低下における人間疎外の増幅」とか「機械論の克服と人権」が壮大に論理展開され結論として「自らの人権感覚をとぎすます」ことが提唱されるに至っている。

臨床医家からの問題提起としてはうなずけない。

本書を読む限り対人サービスの低下も老人病院・「うば捨て病院」においてこそ著しい。「病院自動化」と対人サービスの低下は無関係なのである。そして著者の言う「自動化病院」で起こっている看護労働力の慢性的不足とは、疾病構造の変化・医療の高度化に伴う高度の熟練労働力の必要という事態である。自動化に伴う省力化・「人間疎外」が問題にされているのではない。にもかかわらず「大型機器の導入」の問題性をスケールメリットの問題へと一面化するのみならず、これを自動化と等置することにより、論理が横すべりしているのである。

医療機器の場合、エレクトロニクス的发展・コンピュータ化はスケールメリット論を逆転させる方向に展開されていることを見れば、著者の論理の立て方は時代遅れとすら言い得る。しかしそれ以上に問題なのは、「対人サービス」という概念のあいまいさにあるように思われる。

医師・看護婦の行う臨床労働について考察するとき、急性疾患、特に手術室やICUにおける患者に対する労働（サービス）と慢性疾患の患者に対する指導のような労働（サービス）とは全く異なる性格を持っている。よく論じられる治療と看護の関係以上に重要な問題である。この臨床労働における二側面が内容的に深化することなく、経営的理由から病院の機能分化へと直結していることが、第一線病院の危機であり、臨床労働の様態の変化の分析を媒介にして、問題克服の道を探るべきではないかと思われるのである。

上林茂暢著『病院自動化 その現状と将来』A5判・370頁・定価5,500円・勤草書房・1982年2月20日発行

(医療法人川崎幸病院理事長)
(医療法人石心会川崎幸病院 210 川崎市幸区都町39-1)